

市川金丸¹：東北地方北部の円筒式・大木式土器編年と 十和田中掇テフラ (To-Cu) について

Kanemaru Ichikawa¹: Chronology of cylindrical and Daigi-gakoi pottery
and the fall of Towada Chuseri tephra in the northern Tohoku district

要 旨 東北地方北部では縄文時代前期から中期にかけて円筒土器文化が誕生し展開した。縄文時代前期における円筒土器文化の誕生には、十和田火山から噴出した十和田中掇テフラ (To-Cu) の降灰が影響しており、この火山灰の降下直前の土器群も円筒土器文化の誕生に深く関わっていた。本論では、これまでに行われた十和田中掇テフラ前後の埋蔵文化財の発掘調査を概観し、東北地方北部における降下火山灰層と縄文時代の時期区分に簡単に触れ、その後、円筒土器文化と大木式土器文化の編年の歴史をたどる。そして円筒土器の母胎となる土器群について検討し、円筒下層 a 式の誕生について考察する。また円筒土器文化に併行する大木式土器文化の成立と、相互の交流についても検討する。

キーワード：円筒土器文化、大木式土器、東北地方、十和田中掇テフラ、編年

Abstract In the northern Tohoku district, the cylindrical pottery culture emerged during the early Jomon period. The appearance of the cylindrical pottery culture was closely correlated with the fall of Towada Chuseri tephra (To-Cu) and its effect on previous cultures. Here I briefly describe the history of archaeological excavations across To-Cu, the establishment of tephrochronology of the Jomon period in the northern Tohoku district, and the past chronological studies on the cylindrical and Daigi-gakoi pottery cultures. To trace the origin of type a lower cylindrical pottery, I review pottery types prior to its appearance. I also discuss the birth of the Daigi pottery culture, contemporaneous with the cylindrical pottery culture, and the communication between the two cultures.

Key words: chronology, cylindrical pottery culture, Daigi pottery, Tohoku district, Towada Chuseri tephra

1. はじめに

東北地方北部を中心に縄文時代前期から中期にかけて発展した円筒土器文化が主体的に分布する範囲は、現在のところ、西方が秋田県米代川流域、南方が岩手県宮古市から盛岡市を結ぶ線内、北方が北海道渡島半島であろう。分布の南限としては、能登半島にある石川県能都町貞脇遺跡から円筒下層 d 式期の土器が出土している。西限としては、日本海の山形県沖合の小島・飛鳥勝浦で、円筒上層式土器が出土している。北限としては、北海道奥尻島から円筒上層 d 式土器が出土し、北海道内陸部では石狩平野の石狩町上花畔から円筒上層式土器が出土している。

このように円筒土器文化の波及は広がりを見せ発展し、青森市の国特別史跡三内丸山遺跡の大規模な臨海型拠点集落が出現した。丁度この頃、日本列島には、沖繩地方を含めると 9ヶ所の土器文化圏が個性を競い合っていた。北方の北海道では北筒式土器文化が、東北北部では円筒式土器文化が、東北南部では大木式土器文化が、関東の東方では浮島・阿玉台土器文化が、関東から中部日本では諸磯・勝坂式土器文化が、日本海側東北南部から北陸では長

者ヶ原・馬高式土器文化が、近畿から九州北部にかけて北白川下層・船元式土器文化が広がり、九州では曾根式土器・阿高式土器文化が展開していた。

東北地方の北部と南部には、縄文時代前期から中期になると、土器の形や文様の異なる土器文化が出現し、北部のものは円筒土器文化と、南部のものは大木式土器文化と呼称されている。両文化共に千年以上に亘って継続発展したと考えられている。両文化の年代 (年表) を決める考古学的方法として、土層の累積と層位中の土器の特徴を比較して新・旧を決める相対的土器編年学があり、自然科学的方法としては、植物・動物・貝類・土壌・火山灰などに含まれる炭素などの放射性物質を測定する絶対的年代測定法があり、両方法によって縄文時代の年代が各地で決定されて土器編年表や、我が国の先史時代の年表が作成されている。また、東北地方北部の縄文時代前期における台地の層序と土層と年代を考える時、十和田火山の噴火による降下火山灰が先史文化との関わりの中で特に注目されてきた。いわゆる時空に時間軸を設定するための key (鍵) 層を求めることである。今回は、縄文時代前期に出現した円筒土器文

¹ 〒039-3503 青森市野内字菊川 263-3

Kikukawa 263-6, Nonai, Aomori 039-3503, Japan

化の誕生に視点を置き、特に自然環境との関わりで、十和田火山の噴火による十和田中振テフラ (To-Cu) と円筒下層 a 式土器との関係や降下直前の上器群の特徴などを中心に検討し、これまでの埋蔵文化財の発掘調査から見た To-Cu テフラと前期土器の出上状態について考察する。

2. 十和田中振テフラと埋蔵文化財調査略史

十和田火山と八甲田山を起源とする降下火山灰の中で、縄文時代前期・中期の円筒土器文化と係わる十和田中振テフラ (To-Cu) の前後を中心に、発掘調査により検出した遺構と遺物の状態や調査による観察の結果について紹介する。なかでも、青森県十和田市大字赤沼字寺上に所在する寺上遺跡 (県遺跡番号 06030) の状況について記述する。発掘調査当時、十和田中振テフラは中振浮石として記載されたので、以下ではそのままの呼称で記述する。

寺上遺跡は、奥良瀬川の左岸、標高 60 m の河岸段丘上にみられる。遺跡の西方約 5 km には青森県十和田湖町中振集落があり、中振浮石が発見されて、その名称となった。これまでに発見された遺構と遺物によると、寺上遺跡は、縄文時代早期から前期の貝塚 (5340 ± 50 yr BP) も発見され、同後期に亘る複合遺跡である。出土した土器は、縄文時代早期の土器、前期中葉の早稲田 6 類土器、表館式土器、大木 2 式土器などと、円筒下層 a 式土器、b 式土器、c 式土器、d1 式土器、d2 式土器である。

昭和 40 年代以前の状況

この遺跡はすでに明治 45 (1912) 年に地元の後沢助八氏の書き残した「聞書」の中に記述されている。また昭和 28 (1953) 年には、段丘縁辺に村道を建設中に円筒下層式土器などが多量に発見され、その遺物の一部が十和田市歴史民俗資料館に保管されている。

昭和 40 年代の調査

昭和 41 年に遺跡内の段丘上面に開田工事が始まり、表土が剥がされ遺跡が壊された。十和田市教育委員会では、県文化財専門委員の故音喜多富寿氏と、栗村知弘氏、筆者など、および市職員の安野主事、地元研究家鈴木十志雄氏を動員して踏査した。踏査の段階では、すでにブルドーザーによる剥土が進み、灰黄橙色の中振浮石の層厚は遺跡では 30 ~ 60 cm がみられ、寄せ集められた中振浮石は 3ヶ所に積み上げられていた。中振浮石は、層を形成している時は土量も少ないが、いったんしまりが失われ、空気が入ると数倍の土量に増加する。中振浮石はすべては除去されておらず、所々には黒色の径 3 ~ 5 m で不整円形の落ち込みが数ヶ所認められた。その周辺には、中振浮石 (アワズナ) が全体に付着した縄文時代前期の円筒下層 a 式土器と同 b

式土器が横転して発見された。その後、当遺跡に関しては、行政側の調査体制ができず、開田工事に関する調査では遺物だけ収集し発掘調査出来ずに終わった。

昭和 40 年代の中振浮石の年代位置は火山灰編年表 (松山, 1976) によれば、縄文時代中期~後期ではないかと考えられていた (表 1)。

昭和 49 年 4 月 22 日~同 6 月 16 日には県教育委員会の発掘調査を筆者が担当し、地質分野は松山力氏が担当した。遺跡は五戸川右岸で標高 100m の丘陵北西斜面で、縄文時代後期前葉の竪穴住居跡が発見された。遺跡の地層の層準は第 I 層から第 V 層に区分され、その中の第 IV 層が層厚約 20 ~ 30 cm の中振浮石 (通称アワズナ) と確認された。中振浮石層上面からは竪穴住居跡が掘り込まれており、壁面は浮石のため崩落しやすく、粘土を貼り巡らして防いでいた。遺跡の南側に 500 m 離れて所在する五戸町古街道長根遺跡の発掘調査では、縄文時代後期の十腰内 I 式土器が中振浮石上面から発見された。この両遺跡の調査により、後期前葉の土器を用いた生活が明らかに中振浮石の降下後に行われていることが判明した。

昭和 50 年代の調査

昭和 50 年に発掘調査された三戸郡三戸町泉山遺跡では、縄文時代中期のフラスコ型ピットの覆土に灰黒色によかれた中振浮石が埋土として用いられていた。

昭和 57 年 5 月 10 日~同 6 月 10 日まで上北町と県立郷土館で発掘調査した上北郡上北町古屋敷貝塚は、縄文時代前期の円筒下層 d 式土器~中期末の大木 10a 式土器を伴った複合遺跡である。遺構としては、前期後葉の円筒下層 d1 式期の竪穴住居跡や、フラスコ型ピット、埋設土器などのほか、貝塚を伴っていた。第 1 号竪穴住居跡 (円筒下層 d1 式期) の床面では、中振浮石が貼り床の中に敷きつめた状態で発見された。

昭和 57 年と同 58 年に発掘調査された十和田市明戸遺跡では、円筒下層 d1 式土器が第 III 層 (中振浮石) 上面から横転出土したほか、第 III 層上部には同期の土器が直立して埋設されて出土した。

昭和 57 年 (1982 年) の十和田市相坂遺跡の発掘調査では、第 II 層中振浮石 (層厚 20 cm) 下と第 III 層黒色土層の上部から土器片 6 点が出土した。これらの土器は縄文時代前期の早稲田 6 類土器に比定されている。

十和田市寺上遺跡の調査

平成 8 (1997) 年と同 9 (1998) 年に、前述した十和田市寺上遺跡において、一部道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査が実施された。調査の成果として、遺構では、縄文時代前期の円筒下層 d 式期の竪穴住居跡 2 棟と、土坑

32 基, 溝状ピット 16 基, 焼土遺構 6 基が発見された。出土遺物では縄文時代の土器片が 8168 点と石器 402 点が出土した。時期的には, 縄文時代早期の小舟渡平式土器と, 白浜式土器, 物見台式土器, 早稲田 4 類 (赤御堂式土器), 早稲田 5 類, および前期の表館 X 式土器と, 長七谷地 III 群土器, 早稲田 6 類土器, 表館式土器, 深郷田式土器, 大木 2 式土器 (2a, 2b), 円筒下層 a 式土器, b 式土器, c 式土器, d1 式土器, d2 式土器などが出土した。遺跡の層序は, 第 I 層から第 VIII 層に区分された。このうち第 IV 層は中振浮石で形成され, 層厚は 35 ~ 72 cm がみられた。この層位を中心に, 上部に発見された土器と下部から発見された土器について, 次のような成果を得た。

1) 中振浮石の上部から出土した遺構と土器

第 1 号竪穴住居跡: 平面形は楕円形で長径 788 cm, 短径 620 cm, 確認面からの深さは最大 32 cm, 炉跡は地床炉 2 基, 出土遺物の時期は円筒下層 d1 式土器が出土し, 縄文時代前期後半の竪穴住居跡と考えられた。

第 2 号竪穴住居跡: 住居跡の確認は, 第 IV 層 (中振浮石) の上面から掘り込み面が確認された。平面形は楕円形と推定され, 規模は確認部分で長径 325 cm, 短径 262 cm であった。床面は平坦で確認面からの深さは最大で 50 cm みられ,

炉跡は無く, 出土遺物は土器 2 個体で, 時期は円筒下層 b 式土器であった。したがって縄文時代前期後半と考えられた。

2) 中振浮石の下部から出土した土器

出土した土器は, 縄文時代早期と前期の土器類であった。この中で最も中振浮石に近い土器型式群として, 早稲田 6 類と, 表館式土器, 大木 2 式土器 (大木 2a 式を主体) が出土した (図 1)。

3) 第 IV 層 (中振浮石) に係わる放射性炭素年代

補正 ^{14}C 年代	試料
5670 ± 70	第 V 層上 (腐植質土壌)
5340 ± 50	円筒下層式期貝塚の貝類
4610 ± 70	第 2 号竪穴住居跡の床直 (炭化物)
5150 ± 100	第 VI 層炭化物

以上が, 十和田市寺上遺跡で現在明らかになっている第 IV 層中振浮石と遺構・遺物との係わりである。

ここまでは中振浮石と埋蔵文化財の発見とその出土状況, それらの発掘調査と観察所見を記述した。その後, 中振

表 1 十和田火山新期火山灰層群の放射性炭素年代と遺跡の文化層包含遺物(主に土器)との対比(1976 年 2 月 29 日 松山)

火山灰層序	^{14}C 年代 (年 B.P.; () 内は測定地域) (◎は出土資料等より推定)	遺 跡 名						
		咽畑	新郷村 上栃棚	五戸町 中ノ沢西張	五戸町 古街道長根	三戸町 寺ノ沢	三戸町 泉山	八戸市 新井田石橋
	1450 ± 100 (八甲田地域)							
十和田 a 降下火山灰層	1140 頃◎ (岩手堀野遺跡)							
	1180 ± 80 (田子町袖平牧場)		土師	土師 須恵			土師	土師 須恵
	2140 ± 90 (六ヶ所折茂)							
	2170 ± 80 (八甲田地域)							
十和田 b 降下火山灰層				[土師器]				
	2220 ± 100 (田子町袖平牧場)	晩期 A'					晩期	
	2930 ± 90 (八甲田地域)	A					後期	
	3920 ± 140 (六戸町折茂)	B	後期 (網目)	後期 (大湯式)	後期 (十腰内 I)			
中振浮石層 (アワズナ)							中期 (上層 e)	
	(3680 ± 130 : 大湯浮石直下) (大湯)						中期	
	4200 ± 110 (八甲田地域)							
(前期遺跡及び相当層)	5280 ± 100 (八戸類家 [貝層])						前期	
	5850 ± 100 (百石町日ヶ久保貝塚)						[早期]	
南部浮石層 (ゴロタ)	8600 ± 250 (十和田カルデラ壁)			[欠如]	[早期 (貝殻文)]	早期 (貝殻文)		
八戸火山灰層	12700 ± 270 (五戸町ホド沢)							

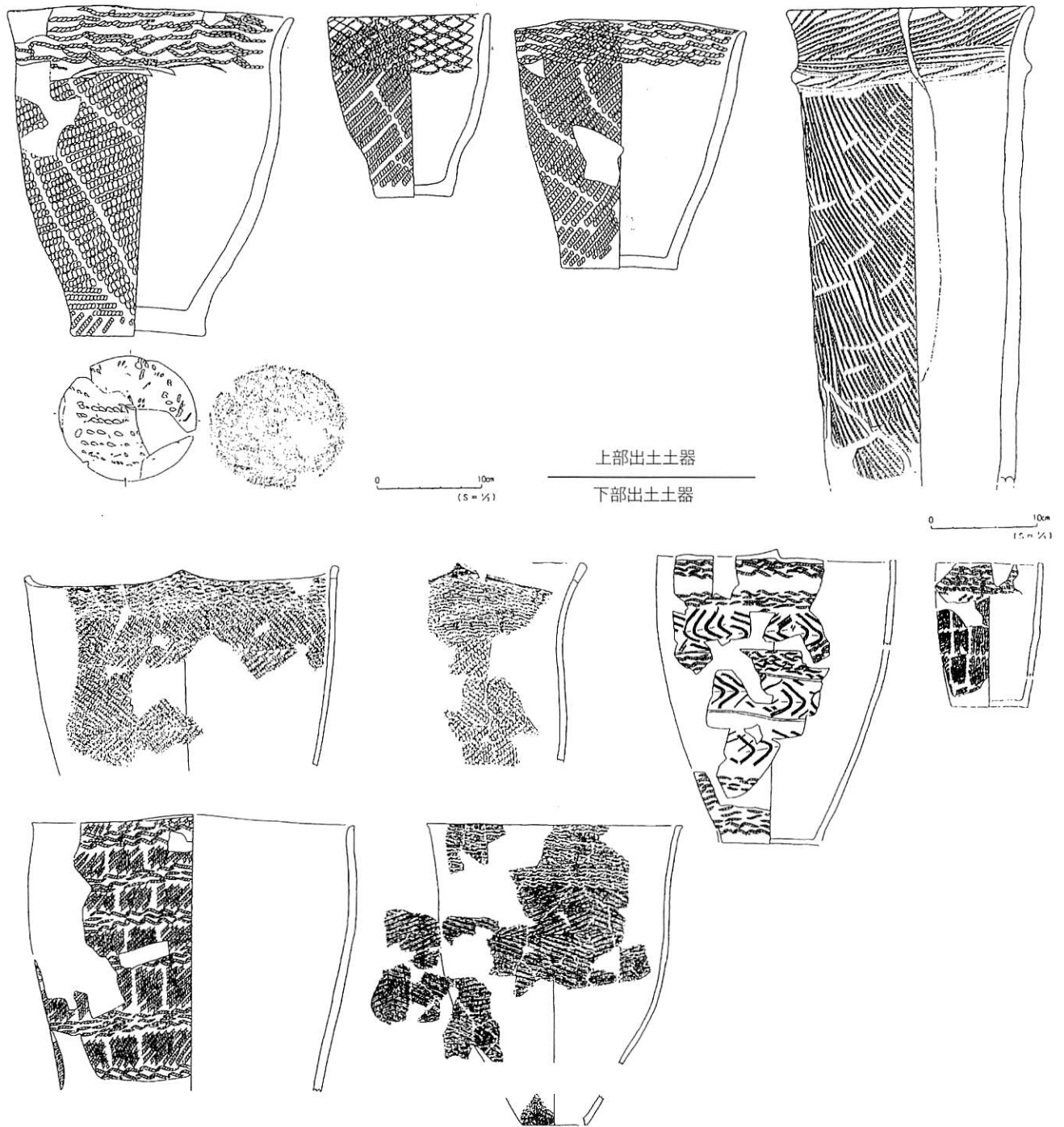


図1 十和田市寺上遺跡で十和田中振テフラの上部・下部から出土した縄文時代前期の土器。

浮石についての見解は改訂され、松山力氏の努力によって、十和田火山完新世火山灰の編年表として現在まで数回にわたって提示されてきた。また高橋与右衛門氏ほかは昭和58(1983)年に、これまでの発掘調査事例を参考として、故大池昭二氏などの火山灰編年(テフロクロノロジー)を考

古学的に検討している。昭和61(1986)年には福田友之氏が各地域の事例を集成し、中振浮石について埋蔵文化財との関係と降下時期などを予察し、その問題点について興味ある提言をしている(福田, 1986)。

また今年(2004年)になって「岩手県内の発掘調査事

例からみた「十和田中振テフラ」をテーマに、星雅之と須原拓の両氏は、共同調査により、東北北部を中心として、岩手や、青森、秋田など広範な地域における十和田中振テフラ (To-Cu) の遺跡調査の成果を取りまとめ、To-Cu の分布と、地形的区分、発見された遺跡の遺構と遺物の土器編年を基準として、中振浮石下前後の状況と降下時期などを、研究史を含めて総合的に考察している (星・須原, 2004)。

以上、資料的に少ない状況のもとで、十和田中振テフラの位置と、最も近接した先史文化の時期を把握するために、記述と考察を進めてきた。大略は、まずこれまでの東北地方北部の資料の分析から明らかになった。今後は、十和田中振テフラの降下による自然環境の変化と文化の動向について、細部に亘って学際的調査と研究が必要である。

3. 第四紀火山噴火堆積物と埋蔵文化財

十和田火山と八甲田山を噴出源としたテフラ (tephra) を基に、東北地方北部の地形や第四系、土壌などの地質学的研究は、1960 年前後から、松井健や、中川久夫、故大池昭二、松山力、七崎修、山口義伸など、多くの地域研究者を中心に進められた。また東北地方第四紀研究グループなどにより、東北地方北部の各地域の火山灰の分布図や地質柱状図、火山灰層序表、あるいは各火山灰層の炭素年代測定や完新世テフラ編年表などとして、数多くの研究成果がこれまでに報告されている。このような地質学研究を主体とした調査によって、テフラと埋蔵文化財である遺構と遺物に関しては、両学に共通な年代基準を追及することになり、背景にある完新世の地史や当時の自然環境と、先史時代や歴史時代との関係がより鮮明になってきた。特に東北地方北部の火山活動を中心とする第四紀の地質学と考古学が共同で作業を進めるようになったのは、我が国が社会的経済的に上昇期を迎え、建設や土木工事に伴う行政発掘調査が盛んになった昭和 40 年代後半に入ってからで、埋蔵文化財の発掘調査における両学の協力へと発展した。

東北地方北部では、故大池昭二氏 (大池, 1972) は、縄文時代から歴史時代の降下火山灰層の区分や噴出年代と縄文時代の時期の関係を、放射性炭素年代と土層層序をもとに、次のように考察し区分している。

1) 二ノ倉火山灰

噴出年代は縄文時代早期初葉～同中葉 (約 9000 年前) と推定している。

2) 南部浮石

本浮石層中の樹幹の炭素年代は 8600 ± 250 年 B.P. と測定されている。本浮石の直上と直下から縄文時代の早期中葉の遺跡 (三ノ町寺ノ沢遺跡) が発見されている。

3) 中振浮石

噴出年代は炭素年代測定値から約 4000 年 B.P. と推定される。考古学的文化層との層位関係についての詳細な報告はないが、縄文中期の遺跡を覆い、直上から縄文後期初葉の沖付式土器 (大湯式土器) を出土する。

4) 十和田 b 降下火山灰

噴出年代は縄文時代後・晩期～弥生時代 (2000 年前) と推定される。

5) 十和田 a 降下火山灰

本火山灰は岩手県二戸市掘野遺跡で検出された竪穴住居跡 (土師器時代, AD810 年頃) を覆う。また、西麓の鷹ノ巣盆地でみられる毛馬内浮石流凝灰岩が胡桃館遺跡 (平安時代末期) を埋没させている。したがって当火山灰の噴出年は、約 1 千年前と推定される。

以上のように完新世テフラは 5 期に分けられ記述されている。火山灰や浮石などの分布と、色調、鉱物的特徴など、地質学的内容についての記述はここでは省略した。現在では、苦小牧火山灰 (白頭山) なども青森県の平安時代の竪穴住居跡に係わるものとして付記しておく。また、これらは昭和 48 年以前の資料を主体としており、その後、現在までの発掘調査や地質学的研究の発展により内容は大きく変わっている。

4. 円筒土器文化と大木式土器文化の 土器編年表作成の経緯

日本列島の新石器時代、縄文時代前期・中期には、北方から南方にかけての 9 地域において、独特な地域土器文化が誕生し発展した。その文化は、急にその地域に誕生したのではなく、母胎となる土器文化がその前に存在しており、周知されている。本論で対象とする東北地方北部の円筒土器文化においては、東北地方南部の大木式土器文化の影響を受けて、円筒下層式土器が成立したものと考えられている。中期前半には円筒上層式土器が出現したとされている。中期後半には、円筒土器の特徴は失われ、土器の器形と文様が変容し、円筒土器文化の時代が終わりを告げるのである。この後、継続した土器文化の特徴は、東北地方南部で発展した大木式土器文化が北部の円筒土器文化に影響を与えたものであり、土器型式名も大木系土器として東北地方北部の土器編年に位置づけられ、南部の大木式土器編年と比較対応させて時期区分が設定されている。この時期の土器文化を代表する遺跡は、東北地方北部では、国特別史跡指定の臨海型大規模拠点集落である三内丸山遺跡 (青森市) や、富ノ沢遺跡 (上北郡六ヶ所村)、二ツ森貝塚 (上

北郡天間林村), 石神遺跡 (西津軽郡森田村), 大平遺跡 (南津軽大鰐町) がある。東北地方南部では, 大木式期の大規模集落遺跡として, 秋田県の大戸森遺跡 (鹿角市花輪) や, 岩手県の西田遺跡 (岩手県紫波町), 宮城県の大木開貝塚と嘉倉遺跡などがある。

こうした遺跡から発見される遺構と遺物には, 時に地域と外来の二つの文化が認められ, それぞれに地域的消長がある。土器文化の広がる地域文化圏を明らかにする上でも, 地域間の時間差を求めるためにも, 土器や遺構の特徴と, その変異を見極めることが大切である。

遺跡は, 時空の中に存在する。この時間軸を最も反映する遺物として土器が選択された。土器は, 複数の機能と用途と考古学的意味を持っている。特に器形と文様の多様化の中から模式化され型式として分類し, 製作された時期を放射性炭素年代などで特定して土器編年を組立てる。それは, 当時の生活文化の背景と歴史を支える規範である。規範の作成にとりかかったのは山内清男氏であって, 特に東北地方の北部と南部における縄文時代の「土器編年表」の作成に努力された。歴史年表に代わるものとして, 「全国各地域」における土器編年の確立が必須な要件であるとし, 自ら土器編年表を作成し, 「大別から細別」をテーマに考古学の規範を論述した (山内, 1937)。

昭和 20 (1945) 年以前の土器編年の経過

大正 14 (1925) 年 4 月には長谷部言人氏 (東北帝国大学教授) と山内清男氏 (同学部) らは, 日本海に面した陸奥国津軽郡相内にある通称オイセドウ貝塚の 2 地点を発掘調査し, 遺物 (円筒下層式土器など) を検出し記録した。翌大正 15 (1926) 年 4 月には太平洋側の陸奥国三戸郡是川村中居に所在する中居貝塚 (現在一王寺貝塚) の 3 地点

表 2 1929 年の編年表

関 東	陸 前	陸 奥
..... 槻木 1		
織 維 A (茅 山)	2	
B (黒谷等)	大木 1	中居貝塚 Ia
	2	b
諸 磯 a	3	c
	4	d
b	5	
阿玉台	6	Ila
	7	b
加曾利 E1	○	
加曾利 E2	8	IIla
加曾利 E3	9	b
	10=境 I	

表 3 縄文土器型式の大別 (1937 年)

	陸 奥	陸 前	関 東
前 期	圓筒土器 下層式 (4 型式以上)	室 濱 大 木 1 " 2a, b " 3-5 " 6	蓮 田 { 花積下 關 山 式 黒 濱 諸磯 a, b 十三坊臺
中 期	圓筒上層 a " b (+) (+)	大 木 7a " 7b " 8a, b " 9, 10	御 領 臺 阿玉臺・勝坂 加 曾 利 E " (新)

を発掘調査し, 両遺跡から出土した土器の器形と文様などの特徴から, 昭和 2 (1927) 年 1 月に長谷部氏は, 「円筒土器」と「円筒土器文化」の名称を出土土器に付した (長谷部, 1927)。一方, 山内氏は発掘調査に層位学技法を取り入れ, 出土した土器の文様の特徴から文様帯系統と文様原体を解明するなど, 土器の保有する特徴の解析に努力され, 東北各地の発掘調査を行った。

東北地方南部では, 宮城県仙台湾周辺に多くの貝塚がみられるが, 中でも宮城県宮城郡七ヶ浜に所在する国指定史跡「大木開貝塚」が大木式土器の標識遺跡として学史に残る著名な貝塚である。遺跡は縄文時代前期・中期が主体の複合遺跡である。東北南部の前期・中期の土器編年のなか

表 4 『日本原始美術 1』所収編年表 (江坂輝彌による; 1964 年)

	東北北部	東北南部	関 東
前 期	ムシリ III 円筒下層 a " b " c " d	室 濱 大 木 1 " 2a " 2b " 3 " 4 " 5 " 6	花積下層 関 山 (文 蔵) 黒 濱 諸磯 a 水 子 " b 矢 上 " c 四枚畑 草 花 十三菩提
中 期	円筒上層 a 円筒上層 b 円筒上層 c 円筒上層 d 榎林 (最花)	大 木 7a " 7b " 8a " 8b " 9 " 10	五領ヶ台: 下小野 勝坂: { 1 阿玉台 { 2 3 加曾利 E { 1 2 3

で、この遺跡から出土した土器群を整理分析して大木式土器の編年が設定された。

大木貝塚は、松本彦七郎博士 (東北帝国大学教授) により、大正 9 (1920) 年に発掘調査され、長谷部言人氏 (東北帝国大学教授) が大正 10 (1921) 年に調査し、清野謙次博士 (東京帝国大学教授) により大正 14 (1925) 年に発掘が行われている。

山内清男氏は、中居貝塚の発掘の次の年、昭和 2 (1927) 年に大木貝塚の発掘調査を始め、昭和 3 (1928) 年まで A～E 地点の 5 地点の発掘調査を行った。山内氏の発掘調査は、地層の層序を時間軸として層位における出土遺物の特徴を他の層位出土の土器と比較して土器編年を組立てる方法で、両遺跡がそうして発掘調査され、東北地方南部と北部の土器編年が作成された。山内氏自筆の土器編年表 (表 2) は、当時発掘調査に参加した伊東信雄氏によれば、伊東氏の手許に残されていた。

この表には、関東と、陸前、陸奥に分けて古い時期から新しい時期に向って土器型式が積み重ねられている。東北地方北部では、中居貝塚が記述されている。型式名は中居貝塚となっているが陸奥国三戸郡大字中居字・王寺であり大字名を付したものであろう。現在は一王寺貝塚である。昭和 4 (1929) 年には、山内清男氏によって、すでに関東―陸前―陸奥の土器編年表の基礎が出来ていたのである。現在の両文化の土器編年表もこのような経過を基盤に作成されている。

このように土器編年は、山内清男氏によって、東日本から北海道にかけて同時期の土器群を広域的に比較して、確立されていった。これは、考古学が歴史学として発展して行くための基本的作業であり、それを実行し考察した卓越した先見性は、我々が学び努力すべきものであり、その方向性や方法と、一連の行動と理論は、研究者にとって最高の贈りものとなった。

5. 円筒土器出現の前期前半の土器群

青森県における前期前半の土器編年は、現在、表館 X 群から始まり表館 XII 群、表館 XIII 群、長七谷地 III 群、表館、芦野 I、早稲田 6 類、深郷 III、円筒下層 a 式、同 b 式、c 式、d1 式、d2 式と編年されている。ここでは、十和田火山噴火によって降下した十和田中振テフラ (To-Cu) と最も関係のある円筒下層式 a 式土器を中心に、円筒土器文化の誕生について予察してみる。

東北地方北部では縄文時代前期中葉に円筒土器文化が誕生し、中期中葉まで凡そ一千年間、生活文化を発展させた。東北地方北部の土器編年から考えて、前期前半に出現し、国史跡長七谷地貝塚から出土した長七谷地 III 群土器はその母胎の一つである。一方、同時期の東北地方南部に

おいて最も近似する土器は上川名 II 式土器であり、この土器は関東地方の花積下層式土器と共通の特徴がみられる。

現在、青森県八戸市に所在する国史跡指定長七谷地貝塚は、昭和 52 (1977) 年に第一次発掘調査が、そして昭和 53 (1978) 年に第二次発掘調査が実施され、縄文時代早期の貝塚と竪穴住居跡、および土器などの多量の遺物が出土した。この中に縄文時代前期の長七谷地 III 群土器が発見された (青森県教育委員会、1985)。

この土器の器形は、平口縁で丸底形深鉢形である。文様は 0 段多条縄文と撚糸文がみられ、口頸部の文様は横走縄文で、撚紐による押捺曲線文からなる文様帯がみられるものや、口縁部の数種幅を無文帯とし胴部文様帯との間に刻みのある細隆帯を巡らすものがある。胴部文様の主体には横帯非結束羽状縄文が多用されている。なかには、胴部下半に横走する縄文や交差状縄文もみられる。この土器の発見によって、この時期の南北の土器型式は結びつき、北海道渡島地方で「桔梗野式」と呼ばれる土器で、函館や千歳市などに広がりを見せているものが併行することが明らかとなった。長七谷地遺跡からは「東釧路 IV 式」土器も発見されている。器形は丸底形深鉢形で口縁はやや小波状口縁で、文様は横位に展開する 2 本合わせの撚紐による木目状撚糸文を主体とする回転文である。北海道奥尻島の松江遺跡 (佐藤、1983) などの共伴事例から、長七谷地 III 群と前後する時期に、隆線貼付の「中茶路式」や、羽状撚糸文、交差状縄文の「網文式」などとの共伴関係が把握されている。このように北海道では、長七谷地 III 群に桔梗野式や、中茶路式、東釧路 IV 式、網文式などが併行すると考えられている。

東北地方北部に隣接する岩手県北部地域では、熊谷常正氏の集成 (熊谷、1989) によると、滝沢村湯舟沢遺跡 (滝沢村教育委員会、1986) や仏沢川遺跡 (滝沢村教育委員会、1987)、雫石町桜松遺跡 (中川、1982) で併行関係がみられる。東北地方南部では、宮城県で、上川名上層式が関係があるものとして把握されている。

関東地方では「花積下層式」と併行関係にあるものと考えられている。このように、東北地方北部の長七谷地 III 群土器と対応する土器を求めると、東日本から北海道に広範に広がる前期土器群の様相が浮かんでくる。

長七谷地 III 群に続くものとして、東北地方北部では、三沢市の早稲田貝塚出土の早稲田 6 類 (a, b, c) と六ヶ所村の表館遺跡出土の表館式土器が考えられている。このうち表館式土器は、当初、青森県六ヶ所村表館遺跡 (佐藤・渡辺、1960) や、三沢市姉沼遺跡 (MacCord、1955)、尾駱出土土器 (明治大学蔵)、金木町芦野遺跡 (名久井、1971)、野口貝塚 (岡本勇調査) で注目された。現在では、表館式土器の広がりには津軽地方に多く、早稲田 6 類は県南

地方から北海道々南部地域に広がることが明らかになっている。

従って、表館式土器と早稲田6類土器群は同時期に存在し、在地性の早稲田6類は太平洋沿岸地域に分布し、表館式土器群は関東地方・東北地方南部から日本海沿岸に広がりをみせると考えられている。現在、燃系主体に施文する深郷田式土器の分布は、太平洋沿岸に少なく、日本海側に片寄るが、この原因を十和田火山噴火による中振浮石の降下の影響とする考えもある（工藤，2002）。

6. 「円筒下層a式」誕生への道すじ

前述のように、早稲田6類土器と、円筒下層a式土器の直前に位置づけられる土器との間には、土器型式相互の型式学的な断絶が大きく、その間に数型式の土器が介在する可能性が認められた。

武藤（1988）は、円筒下層式直前の土器を、器形や文様の特徴などから第1類～第3類に区分し、これらの土器から円筒土器が誕生することを予察した。

第1類土器：平縁の口縁部形態をもつ尖底深鉢形の土器群である。文様帯は口縁部直下に刺突文帯が形成されるものや、胴部に数帯の結節回転文をもつもの、口唇部に刺突文が施文されたもの等が存在する。地文は単節ないし複節の斜行縄文が主体となり、結節羽状縄文や燃系文が施文された土器も共伴する。

資料出土の遺跡には、青森県表館遺跡、同寺ノ上遺跡、同和野前山遺跡、岩手県上里遺跡、同沢内B遺跡、同仏沢遺跡、秋田県下田遺跡がある。

第2類土器：平縁の口縁部形態で、尖底ないし平底の土器である。文様は口縁部に狭く不整燃系文帯が形成されるほか、胴部にも横位に数条の整燃系文帯が施文される。地文の縄文は単節の斜行縄文が主体となるが、結節羽状縄文の施文も顕著である。また燃系文的半数の個体に施文されるようになる。この原体は条の細い縄を密接して巻付けている点に特徴がある。

平底の器形が出現し、平底と尖底が相半ばしていることが第2類土器の特徴の一つである。平底の個体には羽状縄文が、尖底の個体には燃系文が施文される傾向がある。

資料出土の遺跡には、青森県上尾駁（I）遺跡（c区）、同砂沢平遺跡、岩手県沼久保遺跡、同桂平遺跡、同上里遺跡がある。

第3類土器：平縁あるいは低平な4単位の波状縁の口縁部をもち、平底ないしは底部外縁に張り出した小平底の形態をもつ土器である。また極めて僅かではあるが尖底の個

体も存在する。文様帯の構成に関しては、大部分が口縁部文様帯をもたないが、口縁部に2～3条の絡条体の押圧文が施文されるのがある。また器面調整として、内面に条痕が施されるものがあるが、特定の傾向をもって出現することはなく時空的な指標にはならないと考えられる。

資料出土の遺跡は、青森県碓ヶ関村永野遺跡、同金木町芦野遺跡、十和田市寺上遺跡、岩手県中曽根II遺跡、同五庵III遺跡、同上里遺跡、同沼久保遺跡などがある。

このように円筒下層a式土器の直前型式土器群についてもまだ結論を得ることができない状況である。最近の資料の中では、上述の資料のほか青森県階上町白座遺跡や十和田市寺上遺跡なども円筒下層a式の誕生の経緯を物語る資料と筆者は考えている。そして地層の鍵層として中振浮石が役割を果たしてくれると考えている。

7. 大木式土器の様相

縄文時代前期から中期に日本列島に出現する9ヶ所の土器文化圏のうち、北海道では北海道前期円筒式土器文化が、東北地方北部では円筒土器文化が、東北地方南部では大木土器文化が出現し、相互に影響を受応しながら発展する。

大木式土器文化の直前型式土器

1) 上川名II式土器

器形は深鉢型で、土器の胎土には植物が混入されている。

文様は口縁部周辺に文様帯をもつもの、地文のみのものなどがある。文様帯には、燃系圧痕文や、沈線文、両者の併用による燃系沈線文、ループ文、貼付文、刺突文などの組み合わせによって菱形状や、山形状、ワラビ手状、円弧状といった多様な装飾文様が施されるのが大きな特徴である。文様帯はすべて横位に展開し、口縁部に1段施文される場合と、胴部上半部まで2～3段にわたって施文される場合があり、口唇部や口縁部に上端に刺突や刻目がつけられたものも多い。

地文のみのものでは、羽状縄文や単節斜縄文が多数を示している。羽状縄文には、結束羽状縄文と非結束羽状縄文の両方が存在する。単節斜縄文では0段多条のものが大部分を占める。他に燃系文を地文とするものもある。底部にも文様が施文されている。文様帯や口縁部に刻目などをもつものが減少し、羽状縄文では結束羽状縄文が主体を占めるようになる。

2) 大木1式土器

上川名II式にあった口縁部に文様帯をもつものや、燃系圧痕文や、沈線文、刺突文、貼付文、および地文に燃系文が施された土器はほとんど姿を消し、ループ羽状縄文の多用が目立つ。ループ文は、口縁部に末端が重層して数段

横位に回転施文され、口縁部文様帯的な効果をあげている。羽状縄文では非結束羽状縄文が主体を占めるが、原体が多様でしかも異なる原体を横に交互に施文して菱形状の文様にするなど装飾的な意図さえるかがえる。こういった羽状縄文の盛行は関山式などと軌を一にするものであるが、関山式にみられるコンパス文や各種沈線文、イボ状貼付文などの文様要素がまったく入っていない点ではきわめて地域性の強い土器といえよう。底部外面に施文されたものの比率は、この型式ではかなり高い。

3) 大木 2a 式土器

羽状縄文やループ文、斜縄文などの回転縄文や、底部外面の伝統を残しながら、口縁部文様帯や沈線文貼付文などの装飾文様がふたたび出現する。

口縁部文様帯には不整燃糸文や、交互に逆結びした多段結節回転文、幅広の平行沈線文、多段連続刺突文、平行沈線と山形(波状)沈線による文様が施文される場合が多い。また口縁部の突起や波状部分に縦位貼付や鱗状貼付文などを配したものもある。沈線文としてはほかに櫛目状文や、コンパス文、竹管目文、押引文、斜格子文などがある。地文にも新たに網目状や、本目状(羽状)、葎瓦状など各種の燃糸文が出現し盛行する。なかでも、体部全面に葎瓦状燃糸文が施文されたものが多い。

円筒土器文化と大木式土器文化の境界

山内清男氏は、大木式土器文化と円筒土器文化の境を盛岡市米内遺跡から出土した土器を観察して、その附近と考えられた。

昭和 28 (1953) 年には、草間俊一(国立岩手大学)と吉田義昭(盛岡市立中央公民館)の両氏は、北上川と馬淵川の間の中分水嶺附近を両文化の境界とする旨を発表した。昭和 31 (1956) 年には、岩手県にあっては、宮古附近と盛岡市附近を結ぶ線が両土器文化の分布の大体の境界であろうとされた。

山内氏の説に対して、小岩末治氏(国立岩手大学)は、中分水嶺の境界説に反対された。その理由として盛岡市大館堤に両型式土器が出土したことを証左とした。その資料は決定的な資料ではないが看過すわけには行かない。このような考えに対して、昭和 32 (1957) 年 8 月 13 日鈴木孝志氏(国学院大学学生)によって、秋田県松尾村水切場遺跡が発掘調査され、遺跡が前期末葉の時期に、円筒系土器の多く分布する範囲内にあった事を示された。特に縄文時代前期末の円筒下層 d 式土器が主体で、東北地方南部の大木 6 式に近似する土器もあり、なかには大木式土器の影響を受けた円筒土器もあって、この地域は 2 つの土器文化が混合しながらも、円筒土器文化の濃い地域であった

ことを示した。同じく、秋田県鹿角郡八幡平村字宮川に所在する清水向遺跡も水切場遺跡と同様円筒系の遺跡である。この主体性の境界は出土土器の約 50% 以上を占めることで認められるとされた。円筒土器文化の中心地域である東北地方北部でも、例えば大木 2a 式土器は、昭和 32 年(1957 年)の八戸市日計遺跡の発掘調査で出土している。平成 2、3 年の八戸市鮫町沢掘込遺跡や、平成元(1989)年の三戸郡階上村白座遺跡などでは、大木 2a 式や、大木 2b 式、円筒下層 a 式、折衷形の白座式などが出土している。大木 2b 式は、昭和 54 (1979) 年に八戸市長七谷地(2)遺跡と五戸町駒袋遺跡から出土している。

このように両文化の土器の波及は、相互に広がりを見せている。三戸郡福地村館野遺跡からは、円筒下層 b 式土器の口縁部文様帯に横位に展開する本目状燃糸文がみられる。

昭和 41 (1966) 年 6 月 6 日に山内清男氏は「施文原体の研究」ノートに、「盛岡付近は、円筒文化と大木文化の接触地にて、両者の混用の土器が多い。円筒下層式に繊維の混入のないものもある。円筒下層 d 式は、文様帯広くその間に側面に押すいろいろな文様が出てくる。円筒上層になると隆起線の発達と共に複雑化している。円筒土器は、関東の加曾利 E 併行期で終るか。この側面を押す文様は、加曾利 E 並行期の土器の口縁部にみられる」と述べている。いずれにしろ本州北部を南北に縦断する北上川と馬淵川の沿岸は時間を問わず生活情報のネットワークにおける幹線の文化ロードとして発展したものであり、そこにある遺跡には南北両文化の様相と推移が色濃く隠されているものが多い。

8. ま と め

東北地方北部では、縄文時代前期から中期にかけて円筒土器文化が誕生し発展した。同時期の東北地方南部では大木式土器文化が発展する。この両文化は、多分、交流・交易などを背景に相互に生活文化に影響を与え合ったものと思われ、特に土器に強くその反影がよみとれる。両土器文化の新・旧を考古学的方法で解明すべく、土層の堆積上から出土した土器の器形と文様の特徴を層位的・型式学的に整理分析し『土器編年表』として最初に完成させたのは山内清男氏(1929 年)である。山内は、ここに近代考古学の基礎として、先史考古学の方法論を提示し、歴史学への道すじをつくった。

この先史文化の時空の基準は土器を主体とした土器型式学的論証へと発展し、現在、東北地方北部地域では、縄文時代前期・中期の編年として前期 12 型式、中期 10 型式が設定されている。現在の前期・中期の土器編年表は、江坂輝彌氏や、村越潔氏、佐藤達夫氏などの努力によるものが大である。東北地方南部地域では、前期 12 型式、中期

10 型式が編年されており、前期・中期の2千年の時空の基準になっている。今後益々精度を高めて、適正な型式細分へと進化するであろう。

今回の標題の背景には、最近の埋蔵文化財発掘調査により、特別史跡三内丸山遺跡など臨海型大規模拠点集落が明らかになり、縄文時代の発展期が捉えられたことがある。この文化の高揚期に円筒土器文化が出現するが、しかし、その初期の状態が明らかでなく、その前後の様相は不明な点が多い。

土器を指標として考えられることは、例えば、①文様の中に広域性を示すものがある、②地域性で新旧継続する文様がある、③南部からの移動により北部で同時併存する場合がある、④地域で同時併存し、相互の影響により新しい文様が発生する場合がある、⑤自然環境の変化（異常気象、火山噴火）で生活が長年にわたり影響を受け、新しく土器が誕生する、などが考えられる。

東北地方北部の前期中葉の円筒式土器が出現する直前には、八戸市長七谷地貝塚から出土した長七谷地 III 群土器が存在した。この土器と関連する土器は、北方では、北海道渡島半島から道央部の桔梗野式土器と道東の網文式土器と呼称されている土器群である。東北地方以南では、まず長七谷地 III 群土器が青森県から岩手県北部まで広がり、東北地方南部では上名川（2）式土器や桂浜式土器などがあり、関東地方では花積下層式土器が併行関係として考えられている。次に継続する土器型式としては、東北地方北部では早稲田 6 類土器と表館式土器がある。この両型式の土器は、これまで新旧が問われてきたが未だに結論が出ないままである。土器の分布からみると表館式土器は関東の関山 II 式土器を基にしている。関山系土器の分布は広く、東北地方南部の福島県小高町宮田貝塚の宮田 III 式土器と大木 1 式土器や、北海道々南部の春日町式土器など、一連の共通し類似する文様をもつ土器群が南北に広がりをみせている。この広域に広がる土器文様のほか、縄文文様のみの土器や、捺糸文だけの土器など、多様な土器があり、両型式の土器や円筒下層 a 式土器までの間に、土器編年に組み込まれない多様な土器があり、今後新旧を層位学的方法と型式学的方法で土器編年に位置づける作業が必要である。東北地方北部における円筒土器文化の誕生の要因を考えると、最古に位置する円筒下層 a 式土器と東北地方南部の大木式土器との併行関係は、山内清男氏が設定した「円筒下層 a 式土器—大木 1 式」なのか、その後、佐藤達雄氏などが設定した「円筒下層 a 式土器—大木 III 式」なのか、現在検討が進められている。

武藤康弘氏（1991 年）は、これらの前期の土器とその問題点を整理した。それによると、出土遺物から導かれるものとして、①三戸郡階上町白座遺跡では、円筒下層 a 式

と大木 2a 式が併行関係を示しており、②秋田県仙北郡協和町上ノ山 II 遺跡と南秋田郡井川町大野地遺跡では、円筒下層 b 式と大木 4 式が併行関係を示している。また、相原淳一氏は、宮城県三神峰遺跡の発掘調査から大木 2a 式を 3 つに細分している。その中で、円筒下層 a 式と b 式に結節回転文が主体的に施文されているところから、大木 2a 式の細分の中に三神峰遺跡第 1 層出土土器を対比している。円筒下層 b 式土器の隆帯に関しては、大木 2a 式の後半の変化に対応させている。これに対して不整捺糸文の出現や要素は編年学的な対比の指標とは成りえないとし、その理由として、大木式土器の岩手県と秋田県における分布と、秋田県上ノ山 II 遺跡や、大野地遺跡、長者屋敷遺跡の出土資料など、両型式のいずれにも分類が困難な独特な土器群が存在することをあげている。また大野地遺跡から出土した円筒下層 b 式の口頸部文様に大木 4 式の文様が施文されていると言われている。青森県三戸郡福地村に所在する館野遺跡から出土した隆帯区画された口頸部文様には、横方向に菱形に木目状捺糸文が施文され、隆帯下に同様の文様が施文されている。これを大木 2a 式の木目状捺糸文とみることできるが、このような違いは、遺跡の地域性や地理的条件、文化の浸透性などの違いが反映されているものとも思われる。武藤康弘氏は、円筒下層 a 式土器に見られる主体的文様の結節回転文と、胴部文様、器形、底部などをもとに、一地域における円筒下層 a・b 式と大木 2b・3・4 式が併行関係にあるものとする。

これまでは土器型式を中心に紹介してきたが、東北地方北部では、土器型式の変遷に関連して、十和田中振テフラ（To-Cu）がある。これまで東北地方東北部では To-Cu の上下の層に遺物と遺構が発見され、その年代と土器型式が明らかになってきた。その年代測定値と、土器型式、最近の東北地方北部の事例を紹介し、特に円筒下層 a 式土器と To-Cu の上下から発見された土器について紹介した。東北地方北部における中振浮石の下部から出土した土器群の中で最も時間層位的に接近する土器は大木 2a 式土器と考えられる。上部においては円筒下層 a 式土器である。この中で大木 2b 式土器と白座式土器の出土例が今後注意されなければならない土器群である。型式学的に吟味しなければならない土器群として武藤（1988）の第 1 類～3 類土器といった土器群がある。

十和田中振テフラの降下が当時の縄文時代の円筒土器文化に与えた影響はどんな形で受けとめられたのか、火山噴火と縄文社会、そこには計り知れない精神性への影響があり、この延長線に特別史跡三内丸山遺跡の誕生と発展があると言う事実を見極め、より一層文化の動体と消長への思考を深めていく必要がある。

この度、国特別史跡三内丸山遺跡を明らかにするための

特別研究推進事業として総合研究「円筒土器文化の形成と変容、終焉」の代表辻誠一郎氏に対して、総括者として敬意と感謝を申し上げるものである。同氏は、これまで、三内丸山遺跡の発掘調査に参加して、遺跡の出土遺物から「生態史研究」や「較正暦年代編年表」作成など研究成果を進展させている。

今回の課題を、考古学との学際的研究の一環として三内丸山遺跡の解明を画したものと推察した。考古学では土器編年表や集落構造の研究など、それぞれの分野で研究が行われてきたが、その成果や研究の成熟度も進展の速度も、いまだの感が強い。ここからが出発であろう。執筆を終えるにあたり、福田友之氏、川口潤氏から大変お世話になり感謝申し上げる。

引用文献・参考文献

- 青森県教育委員会, 1976, 五戸町中ノ沢西張遺跡・古街道長根遺跡, 青森県埋文報告書第29集, 青森県教育委員会, 青森。
- 青森県教育委員会, 1976, 泉山遺跡発掘調査報告書, 青森県埋文報告書第31集, 青森県教育委員会, 青森。
- 青森県教育委員会, 1980, 長七谷地貝塚, 青森県埋文報告書第57号, 青森県教育委員会, 青森。
- 青森県埋蔵文化財調査センター, 2004, 青森県縄文土器年表, 青森県埋蔵文化財調査センター要覧, 青森県埋蔵文化財調査センター, 青森。
- 福田友之, 1986, 考古学からみた『中振浮石』の降下年代, 弘前大学考古学研究 No. 3: 4-17。
- 長谷部晋人, 1927, 円筒土器文化, 人類学雑誌 41: 28-29。
- 星 雅之・須原 拓, 2004, 岩手県内の発掘調査事例からみた十和田中振テフラ, 岩手県埋文紀要 No. 23: 1-22。
- 伊東信雄, 1977, 山内博士東北縄文土器編年の成立過程, 考古学研究 95, 96: 164-170。
- 上北町教育委員会, 1983, 上北町古屋敷貝塚 遺物編 1, 上北町埋文報告書第1集, 上北町教育委員会, 上北町。
- 興野義一, 1968, 大木式土器理解のために (II), 考古学ジャーナル No. 16: 22-25。
- 工藤 大, 2002, 早稲田第6類土器と表館式土器について, リングサイド II 2: 71-128。
- 熊谷常正, 1989, 岩手県の早期後半から前期初頭にかけての土器群, 第4回縄文文化検討シンポジウム。
- MacCord, H. A. 1955, Contributions to the archaeology of northern Honshu. Part I, Jomon sites in Aomori prefecture, American Antiquity 21: 12-31。
- 村越 潔, 1974, 円筒土器文化, 228 pp, 雄山閣, 東京。
- 武藤康弘, 1988, 東北地方北部の縄文前期土器群の編年学的研究—表館式, 早稲田6類土器をめぐる—, 考古学雑誌 74: 29-51。
- 武藤康弘, 1991, 東北地方北部の縄文前期群の編年学的研究 II—円筒下層 a 式土器群をめぐる—, 考古学雑誌 76: 257-271。
- 名久井文明, 1971, 青森県芦野遺跡の土器群について, 考古学雑誌 57: 1-25。
- 大池昭二, 1972, 十和田火山東麓における完新世テフラの編年, 第四紀研究 11: 228-235。
- 白鳥良一, 1974, 仙台市三神峯遺跡の調査, 『東北の考古・歴史論集』(平重道先生還暦記念会編), 1-54。
- 高橋与右衛門・鈴木克彦・小林 克, 1983, 東北地方北部の遺跡と火山灰の検討, 考古風土記 No. 8: 1-56。
- 滝沢村教育委員会, 1986, 湯舟沢遺跡, 滝沢村文化財報告書第2集, 滝沢村教育委員会, 滝沢村。
- 滝沢村教育委員会, 1987, 仏沢川遺跡, 滝沢村文化財報告書第5集, 滝沢村教育委員会, 滝沢村。
- 十和田市教育委員会, 1998, 寺上遺跡発掘調査報告書, 十和田市埋文報告第8集, 十和田市。
- 山内清男, 1929, 関東北における繊維土器, 史前学雑誌 1: 1-30。
- 山内清男, 1929, 編年表, 『画龍点睛: 山内清男先生没後25年記念論文集』(山内先生没後25年記念論集刊行会, 編, 1996, 山内先生没後25年記念論集刊行会, 会津若松)所収。
- 山内清男, 1937, 縄文土器型式の細別と大別, 先史考古学 1(3): 28-32。

(2005年9月17日受理)